地域医療研究助成金 研究報告書

令和　8年　3月25日

公益社団法人　仁澪会　様

ﾌﾘｶﾞﾅ 氏　名	ｳｴﾀﾞ　ｼﾞｭﾘ 上田　樹里
所属機関 部署・職名	社会医療法人　愛仁会　井上病院 腎臓内科
研究テーマ	慢性血液透析患者における疲労・サルコペニアおよびQOLに及ぼす臨床因子と相互連関に関する実態調査

研究成果の概要

本研究は、愛仁会井上病院（吹田市）において安定した慢性血液透析を受けている患者552名のうち、KDQOL-SF™に回答し、かつサルコペニア評価を実施した94名を対象とした横断研究である。

方法として、対象患者の年齢、性別、原疾患、併存症、透析関連指標などの基本情報に加え、主要評価項目として以下を評価した。A）サルコペニア：Asian Working Group for Sarcopenia 2019の基準に準じ、DXA法による四肢骨格筋量、筋力（握力）、身体機能（歩行速度）を測定した。B）QOL：腎疾患患者のQOL評価として国際的に確立されているKDQOL（Kidney Disease Quality of Life）のSF-36を用い、身体的健康度および精神的健康度を評価した。なお、本研究は井上病院倫理委員会の承認を得て実施した。

KDQOL-SF™の回答から、精神的健康度（MCS）、身体的健康度（PCS）、腎疾患特異的包括的サマリースコア（KDCS）を算出し、これらとサルコペニアとの関連を検討した。解析には、性別、年齢、透析期間、糖尿病の有無を調整因子とした重回帰分析を用いた。

その結果、サルコペニアの有無とPCS、MCS、KDCSとの間に有意な関連は認められなかった。そこで、サルコペニアの構成要素である筋肉量、筋力、歩行速度を用いて同様の解析を行ったところ、筋肉量および筋力はいずれの指標とも有意な関連を示さなかった一方で、歩行速度はPCSと有意に関連していた（$p=0.00263$）。

さらにPCSを構成する８項目について解析した結果、活力、社会生活機能、身体機能、全体的健康感、日常役割機能（身体）において有意な関連が認められた。

歩行速度は、筋力のみならず心肺機能、バランス能力、神経系機能などを反映する包括的な身体機能指標であることから、これら複合的要因がQOLと関連している可能性が示唆された。したがって、バランス能力や関節柔軟性を含めた包括的リハビリテーションにより歩行速度を改善することは、透析患者のQOLおよび予後の改善に寄与する可能性がある。

また、歩行速度のみがQOLと関連した理由として、先行研究では筋力は死亡率と関連する一方、筋肉量は関連しないことが報告されている（Newman AB, J Gerontol A Biol Sci Med Sci. 2006; 61:72-77）。本研究においても、サルコペニア診断に必須とされる筋肉量がQOLと関連しなかったことが、有意差が認められなかった一因である可能性がある。さらに、本研究では筋力を握力により評価しており上肢機能を反映しているのに対し、歩行速度は下肢筋力との関連が強いことから、QOLとの関連には下肢機能がより重要である可能性が考えられた。

帰 国 報 告 書

令和 7 年 11 月 6 日

公益社団法人 仁 澪 会
会 長 様

所　　属　　膠原病・リウマチ内科

職・氏名　　後期研修医・塩見真由

私は、下記のとおり帰国しましたので報告します。

記

1　渡航期間　　令和 7 年 6 月 10 日 から 令和 7 年 6 月 15 日（ 6 日間）

2　渡航先国　　スペイン

3　渡航目的　　臨床研究のポスター発表

4　報告事項　　(広報誌「仁澪」に掲載・８００字(写真は４００字換算))

2025 年 6 月 10 日から 15 日にスペイン・バルセロナで開催された欧州リウマチ学会 (EULAR) に参加し、臨床研究のポスター発表を行いました。当院膠原病・リウマチ内科が参入する関西多施設血管炎コホートのデータを用いて、ANCA 関連血管炎（MPA、GPA、EGPA）の各疾患の臨床的特徴の違いや経時的予後を解析し、新たな知見を示すことができました。従来、ANCA 関連血管炎の治療は副作用の大きい薬剤に頼らざるを得ませんでしたが、近年、アバコパン、メポリズマブ、ベンラリズマブなど分子標的薬が登場し、治療戦略は大きく変化しています。今回の解析では、近年においてグルココルチコイド減量が達成されている一方で、予後の有意な改善にはいまだ至っていないことが明らかとなりました。日常診療の実データに基づいた研究であり、臨床現場への還元が期待されま

す。本学会には世界各国から多様な医師や研究者が集い、活発な討論が行われていました。私の発表後にはヨーロッパやアジアの医師から質問やコメントを受け、地域ごとの治療戦略やグルココルチコイド減量の工夫について意見交換することができました。英語での対話を通じて、異なる医療背景を持つ研究者の視点に触れる貴重な機会となりました。さらに、第一線で活躍する研究者らの講演を直接聴講できたことで、今後の共同研究や知見の国際発信への意欲が一層高まりました。現地でのリアルな交流を通じて、文献だけでは得られない、生きた国際交流の重要性を強く感じる貴重な経験となりました。

帰 国 報 告 書

令和 7年 8月 21日

公益社団法人 仁 澪 会
会 長 様

所 属 肝胆膵外科

職・氏名 大学院生 安田拓斗

私は、下記のとおり帰国しましたので報告します。

記

1 渡航期間 令和 7年 6月 24日 から 令和 7年 6月 26日 (3日間)

2 渡航先国 韓国

3 渡航目的 学会発表

4 報告事項 (広報誌「仁澪」に掲載・８００字(写真は４００字換算))

今回、初めて International Laparoscopic Liver Society という大変貴重な国際学会の場において、「Segment-specific standard approach for laparoscopic liver resection of segment 7 or 8」という題目で発表させて頂く機会を得ました。普段経験している国内での発表とは異なり、会場の雰囲気や聴衆の視線から独特の緊張感を強く感じましたが、その一方で、この場に立てていることへの大きな責任感と喜びを実感いたしました。発表本番では質疑応答の時間も含め、自分の知識と経験を総動員して対応し、なんとか無事に発表を終えることができました。終えた後には達成感とともに、今後さらに研鑽を積まなければならないという新たな課題意識を抱きました。

また学会に参加する中で、肝臓外科領域における内視鏡外科治療の最新の取り組みについて、世界各国の先進的な病院で行われている治療方法や手術手技に触れることができました。普段は文献やオンラインでしか得られない情報を、実際の演者から直接学べたことは大変貴重な経験であり、自身の臨床に直結する大きな刺激となりました。さらに、学会の合間には著名な先生方と直接意見交換する機会に恵まれ、これまで一方的に論文で拝見していた方々と交流を持てたことは大きな財産となりました。特に日本人の先生方とは、今後国内学会でも再びお会いする可能性が高いため、積極的に意見や情報を交換し、交流を深めていきたいと考えております。

この経験を通じて、日々の臨床や研究をさらに充実させ、次年度以降も国際学会で発表できるような成果を積み重ねていきたいと強く思いました。

今回の国際学会への参加は、私にとって初めての挑戦でしたが、非常に有意義で学びの多い時間となり、今後の大きな糧になると確信しております。

帰 国 報 告 書

令和７年７月22日

公益社団法人 仁 澪 会
会 長 様

所　　属 大阪公立大学大学院医学研究科

職・氏名　　大学院生・納谷　幸佑

私は、下記のとおり帰国しましたので報告します。

記

1　渡航期間　　令和７年７月11日　から　令和７年７月16日（　6　日間）

2　渡航先国　　アメリカ合衆国

3　渡航目的　　ポスター発表のため

4　報告事項　　（広報誌「仁澪」に掲載・８００字(写真は４００字換算)）

この度国際内分泌学会(ENDO2025)に参加しポスター発表の機会を得ることができた。著名な研究者・臨床医の講演を直接聴講することができたのは貴重な経験となった。特に副腎セッションでは、最新の知見や AI を含む展望に関する議論から多くを学んだ。私は”Relationship between confirmatory testing for primary aldosteronism and glomerular hyperfiltration”というタイトルで原発性アルドステロン症の機能確認試験と糸球体過剰濾過に関係について演題発表を行った。質疑応答では参加者の関心を肌で感じ、英語での応答にも準備を重ねて落ち着いて対応できた。現在進行中の臨床研究をさらに発展させる上で有用な知見や新たな視点を数多く得ることができた。得られた知見と反省点を糧とし、より洗練された形で国際発表に臨みたいと思う。

帰 国 報 告 書

令和 7年 9月 24日

公益社団法人 仁 澪 会
会 長 様

所 属 診断病理・病理病態学

職・氏名 大学院生 加藤 雅大

私は、下記のとおり帰国しましたので報告します。

記

1 渡航期間 令和 7年 9月 14日 から 令和 7年 9月 18日 (5日間)

2 渡航先国 ポルトガル

3 渡航目的 希少骨軟部腫瘍の診断検討会議に参加する

4 報告事項 (広報誌「仁澪」に掲載・８００字(写真は４００字換算))

この度、ポルトガルのリスボンにて 2025 年 9 月 14 日～9 月 19 日の期間に開催された 2025 51st Annual Meeting: ISS(International Skeletal Society) Musculoskeletal Diagnostic Meeting に参加してまいりました。本会議は骨腫瘍に特化した国際的な学術集会であり、放射線科医や病理医、整形外科医など骨腫瘍の専門家が世界から集まり、骨腫瘍の難解な症例や希少症例の検討ならびに最新の知見の共有を行う場となっています。

私たちは大阪公立大学医学部附属病院にて経験された稀な悪性 Triton 腫瘍の一例を応募し、Member's meeting と呼ばれる症例検討会の 60 症例のひとつに選定され、現地 16 日に病理医として症例発表を行いました。事前アンケートや質疑応答を通じて世界の専門家たちの意見が得られ、実りのある発表となりました。

本会議を通じて骨腫瘍の国際的な潮流に触れるとともに、日々の診療で稀に遭遇しうる、診断に悩むような希少骨腫瘍に関する知識を多数得ることができました。得られた知見を院内で共有し、今後とも診断精度の向上に努めてまいります。



帰　国　報　告　書

令和 7 年 10 月 30 日

公益社団法人 仁 澪 会
会　長　様

所　　属　　整形外科

職・氏名　　病院講師　永井洋輔

私は、下記のとおり帰国しましたので報告します。

記

1　渡航期間　令和 7 年 10 月 19 日　から　令和 7 年　10 月 26 日（　8 日間）

2　渡航先国　メキシコ

3　渡航目的　International Orthopedic Trauma Association　＃2　への参加

4　報告事項　（広報誌「仁澪」に掲載・８００字(写真は４００字換算)）

メキシコ・グアダラハラで開催された IOTA 2nd Congress に参加し、「Submuscular Anterior-Inferior MIPO for Clavicle Mid-shaft Fractures in Athletes」という演題で発表を行いました。本学会は XXXV Mexican Congress of Orthopaedics and Traumatology (FEMECOT 2025)との併催で、メキシコをはじめ世界中から多くの参加者が集まり、多くの発表と活発な討論が行われました。次回 (2028 年) が日本開催ということもあり、日本からも 30 人以上の整形外傷医が参加していました。初日は、他の日本人参加者の発表を中心に、シンポジウムや友人の発表を聞いてレセプションまで過ごしました。レセプションでは、多くの日本人参加者が Fellow of IOTA の称号を授与され(残念ながら、今回私は対象外でした)、

本学会での日本のプレゼンスを高められたのではないかと思っています。私の発表は、2日目にTips&Trickのセッションでした。日本人の発表が少ないセッションでしたが、術式の工夫や復帰時期について質問をいただき、発表後も海外の先生から多くのご意見をいただきました。国際的な舞台で印象的な発信ができたのではと思います。英語での発表や旧友との交流を含め、貴重な経験ばかりでした。このような機会を与えてくださった関係者の皆様、仁零会のご支援、不在を許容し快く送り出してくれた教室の同僚に心から感謝申し上げます。



写真1　　発表する筆者



Team Japan　（日本から40人近い参加がありました。）

帰 国 報 告 書

令和７年12月12日

公益社団法人仁澪会
会 長 様

所 属 大阪公立大学大学院女性病態医学

職・氏名 安田 恭輔

私は、下記のとおり帰国しましたので報告します。

記

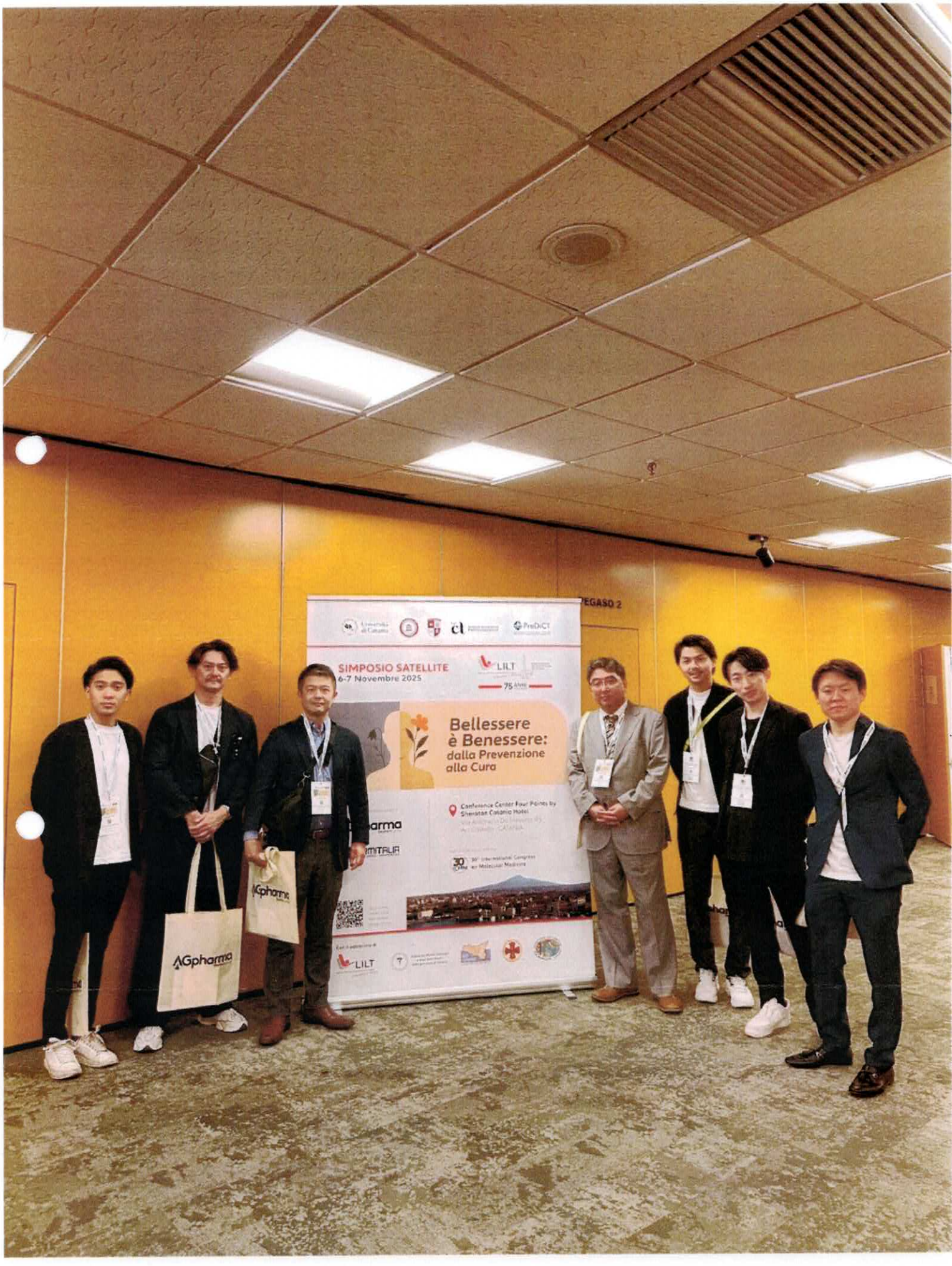
1 渡航期間 令和7年11月4日 から 令和7年11月9日 (6日間)

2 渡航先国 イタリア・シチリア

3 渡航目的 国際学会における研究成果発表のため

4 報告事項 (広報誌「仁澪」等に掲載・８００字(写真は４００字換算))

2025年11月、イタリア・シチリアで開催された *The 26th International Symposium on Molecular Medicine organized by the World Academy of Sciences* に参加し、「Pembrolizumab/Lenvatinib Combination Therapy for Uterine Corpus Cancer: A Single-Center, Retrospective Analysis」についてE-poster発表を行いました。本研究では、当院で治療を受けた進行・再発子宮体癌症例を対象として、Pembrolizumab/Lenvatinib併用療法の治療効果と安全性を後方視的に検討し、その成果を国際学会の場で公表することができました。会場では免疫治療を扱う演題が多く、併用療法に関連する最新のエビデンスやバイオマーカー研究の動向に触れることができ、日常診療を見直す上で非常に有益でした。また、他施設の取り組みや発表内容を比較することで、当院の症例の位置付けや今後の課題を客観的に整理する良い機会となりました。今回得られた知見を今後の診療および研究活動に還元していきたいと考えています。


SIMPOSIO SATELLITE
6-7 Novembre 2025
LILT
75 Anni
Bellessere
è Benessere:
dalla Prevenzione
alla Cura
Conference Center Four Points by
Sheraton Catania Hotel
AGpharma

帰 国 報 告 書

令和 7 年 11 月 22 日

公益社団法人 仁 澪 会
会 長 様

所　属　女性病態医学

職・氏名　大学院生　田川　南斗

私は、下記のとおり帰国しましたので報告します。

記

1　渡航期間　令和 7 年 11 月 4 日 から 令和 7 年 11 月 9 日（6 日間）

2　渡航先国　イタリア　カターニア

3　渡航目的　国際学会参加

4　報告事項　（広報誌「仁澪」等に掲載・８００字(写真は４００字換算)）

このたび、イタリア・カターニアで開催された International Conference on Molecular Medicine に参加する機会をいただきました。本学会は分子医学分野の臨床医や研究者が集まる国際的な場であり、多彩な発表や議論が行われ、活発な情報交換がされていました。普段の診療や国内での活動だけでは触れることの少ない、多様な臨床的視点や治療方針の違いに触れることができ、自分の診療の幅を広げる非常に貴重な経験となりました。

私は今回、Pembrolizumab の治療に関する症例報告をデジタルポスターとして提出し、国際的な医師や研究者に向けて自身の臨床経験を共有する機会を得ました。デジタル形式での掲示であったため、発表内容を整理してわかりやすくまとめることができ、自身の症例対応や治療方針を改めて振り返る良い機会にもなりました。また、学会全体を通して、世界各国での治療方針や対応の違い、最新の臨床報告に触れることができたことは、日々の診療に新たな視点や工夫を取り入れるヒントにもなりました。症例報告を通じて、臨床現場の経験が国際的に知見として共有される重要性も改めて実感することができ、同じ臨床医としての視点を持つ他国の医師の考え方や治療方針の多様性を知る貴重な機会となりました。短い滞在ではありましたが、今回の学会参加は、国際的な舞台で自身の臨床経験を発信することの意義を強く感じる非常に価値のある機会となりました。また、国際学会の雰囲気を直接体感したことで、今後の学会参加や症例報告の発表に向けた意欲も高まりました。今回得た学びを今後の臨床活動に生かし、より一層精進してまいります。

帰 国 報 告 書

令和 7 年 12 月 12 日

公益社団法人 仁 澪 会
会 長 様

所　　属　放射線診断学・IVR 学

職・氏名　博士課程・光山　容仁

私は、下記のとおり帰国しましたので報告します。

記

1　渡航期間　　令和　7 年　11 月　30 日　から　令和　7 年　12 月　4 日（　　5 日間）

2　渡航先国　　アメリカ合衆国

3　渡航目的　　第 111 回北米放射線学会（RSNA 2025）にて学会発表を行うため。

4　報告事項　　（広報誌「仁澪」等に掲載・８００字(写真は４００字換算)）

この度、仁澪会の皆様より多大なるご支援を賜り、2025 年 11 月 30 日から 12 月 4 日にかけてアメリカ合衆国シカゴのマコーミックプレイスで開催された第 111 回北米放射線学会（RSNA 2025）に参加し、研究発表を行う機会をいただきました。ここに謹んでご報告申し上げるとともに、心より感謝申し上げます。

RSNA は世界最大規模の放射線医学の学会であり、世界中から放射線科医、技師、企業関係者が集い、最新の知見や技術が共有される場で、会場に入ると「放射線医学の最先端に身を置いている」という高揚感を強く感じました。私は、胸部単純写真から AI が推定した健康年齢の ICU 予後予測における有用性について、12 月 1 日にポスター発表を行いました。準備段階では英語での質疑応答に不安もありましたが、本番では各国の研究者から 1 万件を超えるデータ収集の方法や今後の研究の発展計画など、建設的なご意見を多数いただくことができました。また、学会期間中は最新の機器展示や教育講演を通じて、診断精

度の向上やワークフローの効率化に対する世界的なトレンドを肌で感じることができ、明日からの臨床・研究へのモチベーションが大きく向上しました。

今回の貴重な経験は、私個人の研鑽に留めず、日々の診療への還元はもちろんのこと、後輩への指導や今後の研究活動を通じて、母校および医学界の発展に微力ながら貢献していく所存です。最後になりますが、このような素晴らしい機会を与えてくださった仁澪会の皆様に、改めて深謝いたします。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

帰　国　報　告　書

令和　7　年　9　月　26　日

公益社団法人 仁 澪 会
会　長　様

所　　属　　医学研究科　整形外科学

職・氏名　　大学院生　谷脇浩志

私は、下記のとおり帰国しましたので報告します。

記

1　渡航期間　　令和 7 年 3 月 19 日　から　令和 7 年 3 月 21 日（　3　日間）

2　渡航先国　　韓国

3　渡航目的　　口演発表

4　報告事項　　（広報誌「仁澪」に掲載・８００字(写真は４００字換算）

このたび、2025 年 3 月 19 日から 21 日に韓国・ソウルで開催された第 15 回 Cervical Spine Research Society–Asia Pacific（CSRS-AP 2025）に参加し、口演発表を行いました。本学会はアジアを中心として世界各国から最新の知見が報告される国際的な場であり、多くの参加者と活発な議論が交わされました。私は大学院生として「Does Cervical Paraspinal Muscle Degeneration Influence Quality of Life After Cervical Spine Surgery?」を発表し、今後の研究・論文活動につながる多くの示唆を得ることができました。本発表にあたりご指導を賜りました玉井孝司先生、また大学院生が国際学会で発表できる環境をつくってくださっている寺井秀富教授、中村博亮病院長に心より感謝申し上げます。



帰 国 報 告 書

令和 7年 11月 22日

公益社団法人 仁 澪 会
会 長 様

所 属 女性病態医学教室

職・氏名 大学院2年生 千菊 智紀

私は、下記のとおり帰国しましたので報告します。

記

1 渡航期間 令和 7年 11月 4日 から 令和 7年 11月 9日 (6日間)

2 渡航先国 カターニア イタリア

3 渡航目的 30th International Conference on Molecular Medicine への参加

4 報告事項 (広報誌「仁澪」に掲載・８００字(写真は４００字換算))

この度、大阪公立大学医学部医学研究科女性病態医学教室大学院 2 年生としてカターニアで行われた国際学会に参加して参りました。発表内容は「広汎子宮全摘出術後に術後補助治療として TP 療法が実施された再発中リスクまたは高リスクの子宮頸癌患者の再発に対するバイオマーカーとしての CEA 値」との演題でポスター発表でした。当院で治療を行った 96 症例を再発群と非再発群に分け術前の CEA 値や臨床的特徴について後方視的に検討を行いました。結果は再発群で術前 CEA 値が有意に上昇しており独立した再発予測因子でした。初の国際学会への参加であり、発表やスライド内容がすべて英語での作成であり難渋しましたが無事発表をすることができました。海外での国際学会は日本の学会とはまた異なった開放的な雰囲気があり大変な刺激になりました。この経験を今後の臨床や研究に生かしていきたいと思います。ご指導いただきました角教授ならびに共同演者の福田准教授をはじめ女性診療科の先生方に感謝申し上げます。


EGASO 2
Bellessere
è Benessere:
dalla Prevenzione
alla Cura

帰　国　報　告　書

令和 8 年 2 月 24 日

公益社団法人 仁 濟 会
会　長　様

所　属 形成外科

職・氏名 森川 周史

私は、下記のとおり帰国しましたので報告します。

記

1　渡航期間　令和 7 年 11 月 8 日から令和 7 年 11 月 11 日（4 日間）

2　渡航先国　韓国

3　渡航目的　PRS KOREA（韓国形成外科学会）より invited speaker.

4　報告事項（広報誌「仁濟」等に掲載・８００字（写真は４００字換算））

今回、2025年11月8日～11日まで韓国・カンナムにおいて開かれました韓国形成外科学会(PRS KOREA)に招待演者として発表してまいりました。「Surgical offloading strategies beyond Haps for Patients with Diabetic foot Ulcers」の題目で、糖尿病性足潰瘍に対する治療戦略を中心に発表を行いました。前後にスペインの著名な先生方の講演を含めた、創傷分野での top runner の方々と並んでの登壇となり思いの外 discussion や質疑などもあったことから、非常に有意義であると思いました。Surgical offloading：外科的免荷治療は、足底部で創をつくる糖尿病患者にとって非常に有用な治療ではありますが、日本ではまだまだお勧めする先生も多く、このような国際学会で海外の医師との情報交換や up date は必要不可欠であると思いました。
今回仁濟会様のご厚意により助成金を頂けることは、非常に有難く、感謝に絶えません。有り難うございました。